

Oracle® Solaris Studio 12.2 インストール ガイド

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, duplication, disclosure, modification, and adaptation shall be subject to the restrictions and license terms set forth in the applicable Government contract, and, to the extent applicable by the terms of the Government contract, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software License (December 2007). Oracle America, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション（人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む）への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことに起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

Oracle と Java は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

AMD、Opteron、AMD ロゴ、AMD Opteron ロゴは、Advanced Micro Devices, Inc. の商標または登録商標です。Intel、Intel Xeon は、Intel Corporation の商標または登録商標です。すべての SPARC の商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc. の商標または登録商標です。UNIX は X/Open Company, Ltd. からライセンスされている登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

はじめに	7
1 インストールの準備	13
ソフトウェアのインストールの概要	13
システム要件	14
インストーラのローカル表示とリモート表示の選択	15
▼ リモート表示によるインストールの準備	15
NFS マウントのファイルシステムへのインストール	16
▼ NFS マウントのファイルシステムに Oracle Solaris Studio ソフトウェアをイン ストールする準備をする	17
インストール方法の選択	17
2 Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアのインストール	19
Oracle Solaris Studio ソフトウェアのインストール	19
ゾーンへのインストール	19
代替ルートディレクトリへのインストール	20
複数システムへのインストール	20
グラフィカルユーザーインターフェースのインストーラを使用した Oracle Solaris Studio のインストール	20
GUI インストーラを使用した実行時ライブラリのためのインストール	23
非 GUI インストーラを使用した Oracle Solaris Studio のインストール	24
非 GUI インストーラを使用した実行時ライブラリのためのインストール	25
必要な Oracle Solaris OS パッチのインストール	25
開発ツールとマニュアルページ用の環境変数の設定	26
Oracle Solaris Studio 12.2 IDE の起動	27

3	Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアのアンインストール	29
	以前のリリースの Sun Studio ソフトウェアがインストールされている場合のアンインストール	29
	アンインストーラのローカル表示とリモート表示の選択	29
	▼ リモート表示によるアンインストールの準備	29
	ソフトウェアのアンインストール	30
	▼ GUI アンインストーラによるアンインストール	30
	▼ 非 GUI アンインストーラによるアンインストール	31
4	トラブルシューティング	33
	TMPDIR が、すべてのユーザーに書き込みを許可するディレクトリを指していない場合、GUI インストーラが失敗する	33
	GUI インストーラを起動するときに GNOME エラーが発生する場合がある	34
	インストーラのロックファイルが原因でインストーラを起動できない場合がある	34
	失敗したインストールまたはアンインストールの対処	34
	▼ Solaris プラットフォームで失敗したインストールまたはアンインストールの対処	35
	▼ Linux プラットフォームで失敗したインストールまたはアンインストールの対処	35
	NFS マウント済みファイルシステムでは、書き込み権限が設定されていない場合、インストールが失敗する	36
	インストールログファイルの表示	36
A	インストーラ、アンインストーラ、install_patches ユーティリティの コマンド行オプション	37
	GUI インストーラのコマンド行オプション	37
	非 GUI インストーラのコマンド行オプション	38
	アンインストーラのコマンド行オプション	39
	install_patches.sh ユーティリティのコマンド行オプション	40
B	スワップ空間の追加	41
	スワップ空間の追加	41
	▼ Solaris システムでのスワップ空間の追加	41
	▼ Linux システムでのスワップ空間の追加	42

C	Oracle Solaris 12.2 のコンポーネントとパッケージ	45
D	パッチの識別番号と説明	49
E	Oracle Solaris Studio 12.2 コンポーネントのバージョン番号	51
	索引	53

はじめに

『Oracle Solaris Studio 12.2 インストールガイド』では、次のタスクの実行手順を説明します。

- パッケージインストーラを使用した Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアのインストール
- 必要な Oracle Solaris 10 パッチのインストール
- 統合開発環境 (IDE) の実行
- Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアのアンインストール

注 - この Oracle Solaris Studio のリリースは、SPARC および x86 ファミリ (UltraSPARC、SPARC64、AMD64、Pentium、Xeon EM64T) プロセッサアーキテクチャを使用するシステムをサポートしています。使用の Solaris オペレーティングシステムのバージョンに対するシステムサポート状況は、ハードウェア互換性リスト (<http://www.sun.com/bigadmin/hcl>) をご参照ください。ここには、すべてのプラットフォームごとの実装の違いについて説明されています。

このドキュメントでは、x86 関連の用語は次のものを指します。

- 「x86」は、64 ビットおよび 32 ビットの x86 互換製品を指します。
- 「x64」は、AMD 64 または EM64T システムで、特定の 64 ビット情報を指します。
- 「32 ビット x86」は、x86 ベースシステムで特定の 32 ビット情報を指します。

サポートされるシステムについては、ハードウェアの互換性に関するリストを参照してください。

対象読者

このマニュアルは、ソフトウェアのインストールを行うシステム管理者、およびソフトウェア開発アプリケーションを使用する開発者を対象にしています。Oracle Solaris オペレーティングシステムと UNIX コマンドの使用経験があることを前提にしています。

Oracle Solaris Studio ドキュメントへのアクセス

マニュアルには、次の場所からアクセスできます。

- マニュアルは、次に示すマニュアル索引のページからアクセスできます。<http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/solarisstudio/documentation/index.html>。
- IDEのすべてのコンポーネントのオンラインヘルプには、IDE内の「ヘルプ」メニューだけでなく、FIキー、および多くのウィンドウやダイアログボックスにある「ヘルプ」ボタンを使用してアクセスできます。
- パフォーマンスアナライザとスレッドアナライザのオンラインヘルプには、パフォーマンスアナライザ内の「ヘルプ」メニューだけでなく、FIキー、および多くのウィンドウやダイアログボックスにある「ヘルプ」ボタンを使用してアクセスできます。
- DLightとdbxtoolのオンラインヘルプには、これらのツール内の「ヘルプ」メニューだけでなく、FIキー、および多くのウィンドウやダイアログボックスにある「ヘルプ」ボタンを使用してアクセスできます。

アクセシブルな製品マニュアル

マニュアルは、技術的な補足をすることで、ご不自由なユーザーの方々にとって読みやすい形式のマニュアルを提供しております。アクセシブルなマニュアルは次の表に示す場所から参照することができます。

マニュアルの種類	アクセシブルな形式と格納場所
マニュアルとチュートリアル	HTML形式。 http://docs.sun.com にある Oracle Solaris Studio 12.2 Collection - Japanese から選択
『Oracle Solaris Studio 12.2 リリースの新機能』(以前のリリースで、コンポーネントのReadmeに含まれていた情報)	HTML形式。 http://docs.sun.com にある Oracle Solaris Studio 12.2 Collection - Japanese から選択
マニュアルページ	man コマンドを使用して、インストールされた製品内から入手可能
オンラインヘルプ	HTML形式。IDE、パフォーマンスアナライザ、DLight、およびdbxtoolの「ヘルプ」メニュー、「ヘルプ」ボタン、およびFIキーを使用して表示
リリースノート	HTML形式。 http://docs.sun.com にある Oracle Solaris Studio 12.2 Collection - Japanese から選択

関連するサードパーティのWebサイトリファレンス

このマニュアルには、詳細な関連情報を提供するサードパーティのURLが記載されています。

注- このマニュアルで紹介するサードパーティ Web サイトが使用可能かどうかについては、Oracle は責任を負いません。このようなサイトやリソース上、またはこれらを経由して利用できるコンテンツ、広告、製品、またはその他の資料についても、Oracle は保証しておらず、法的責任を負いません。また、このようなサイトやリソースから直接あるいは経由することで利用できるコンテンツ、商品、サービスの使用または依存が直接のあるいは関連する要因となり実際に発生した、あるいは発生するとされる損害や損失についても、Oracle は一切の法的責任を負いません。

表記上の規則

このマニュアルでは、次のような字体や記号を特別な意味を持つものとして使用します。

表 P-1 表記上の規則

字体または記号	意味	例
AaBbCc123	コマンド名、ファイル名、ディレクトリ名、画面上のコンピュータ出力、コード例を示します。	.login ファイルを編集します。 ls -a を使用してすべてのファイルを表示します。 system%
AaBbCc123	ユーザーが入力する文字を、画面上のコンピュータ出力と区別して示します。	system% su password:
<i>AaBbCc123</i>	変数を示します。実際に使用する特定の名前または値で置き換えます。	ファイルを削除するには、rm <i>filename</i> と入力します。
『』	参照する書名を示します。	『コードマネージャ・ユーザーズガイド』を参照してください。
「」	参照する章、節、ボタンやメニュー名、強調する単語を示します。	第5章「衝突の回避」を参照してください。 この操作ができるのは、「スーパーユーザー」だけです。

表 P-1 表記上の規則 (続き)

字体または記号	意味	例
\	枠で囲まれたコード例で、テキストがページ行幅を超える場合に、継続を示します。	sun% grep '^#define \ XV_VERSION_STRING'

コード例は次のように表示されます。

- C シェル


```
machine_name% command y|n [filename]
```
- C シェルのスーパーユーザー


```
machine_name# command y|n [filename]
```
- Bourne シェルおよび Korn シェル


```
$ command y|n [filename]
```
- Bourne シェルおよび Korn シェルのスーパーユーザー


```
# command y|n [filename]
```

[] は省略可能な項目を示します。上記の例は、*filename* は省略してもよいことを示しています。

| は区切り文字 (セパレータ) です。この文字で分割されている引数のうち 1 つだけを指定します。

キーボードのキー名は英文で、頭文字を大文字で示します (例: Shift キーを押します)。ただし、キーボードによっては Enter キーが Return キーの動作をします。

ダッシュ (-) は 2 つのキーを同時に押すことを示します。たとえば、Ctrl-D は Control キーを押したまま D キーを押すことを意味します。

ドキュメント、サポート、およびトレーニング

追加のリソースについては、次の Web サイトを参照してください。

- [ドキュメント \(http://docs.sun.com\)](http://docs.sun.com)
- [サポート \(http://www.oracle.com/us/support/systems/index.html\)](http://www.oracle.com/us/support/systems/index.html)
- [トレーニング \(http://education.oracle.com\)](http://education.oracle.com) – 左側のナビゲーションバーで Sun へのリンクをクリックしてください。

ご意見の送付先

マニュアルの品質や使いやすさに関するご意見やご提案をお待ちしています。間違いやその他の改善すべき箇所がありましたら、<http://docs.sun.com>で「Feedback」をクリックしてお知らせください。ドキュメント名とドキュメントのPart No.、および、可能な場合は章、節、ページ番号を記載してください。返答が必要な場合はお知らせください。

Oracle 技術ネットワーク (<http://www.oracle.com/technetwork/index.html>) では、Oracle ソフトウェアに関するさまざまなリソースを提供しています。

- 技術上の問題やソリューションについては、ディスカッションフォーラム (<http://forums.oracle.com>) を参照してください。
- 実践的なステップ・バイ・ステップのチュートリアルについては、Oracle By Example (<http://www.oracle.com/technology/obe/start/index.html>) を参照してください。
- サンプルコードのダウンロードについては、サンプルコード (http://www.oracle.com/technology/sample_code/index.html) を参照してください。

◆◆◆ 第 1 章

インストールの準備

この章には、次の情報が含まれます。

- 13 ページの「ソフトウェアのインストールの概要」
- 14 ページの「システム要件」
- 15 ページの「インストーラのローカル表示とリモート表示の選択」
- 16 ページの「NFS マウントのファイルシステムへのインストール」
- 17 ページの「インストール方法の選択」

ソフトウェアのインストールの概要

この節では、Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェア、製品シリアル番号、およびサポートソフトウェアをインストールする一般的な手順の概要を説明します。

手順	タスク	内容の説明	参照先
1.	Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアのインストール先のシステムが、このリリースの最小ハードウェアおよびソフトウェア要件を満たしていることを確認します。	適切なパフォーマンスを得るために、システム要件に合ったシステムを使用することをお勧めします。	14 ページの「システム要件」を参照
2.	ローカル表示とリモート表示のどちらでインストーラを使用するかを決定します。	Oracle Solaris Studio ソフトウェアは、リモート表示またはローカル表示のどちらを使用してもインストールできます。	15 ページの「インストーラのローカル表示とリモート表示の選択」を参照
3.	インストール方法を選択します。	Oracle Solaris Studio ソフトウェアをインストールするには、次の 2 通りの方法があります。	17 ページの「インストール方法の選択」を参照

4. Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアと必要な OS パッチをインストールします。手順に従ってインストールを行います。19 ページの「Oracle Solaris Studio ソフトウェアのインストール」を参照

システム要件

Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアのハードウェアおよびオペレーティングシステム要件は、表 1-1 に示すとおりです。

注- このリリースのディスク容量要件および重要な最新情報については、<http://docs.sun.com/app/docs/doc/821-1785> にあるリリースノートを参照してください。

表 1-1 システム要件

	Solaris OS SPARC ベースシステム	Solaris OS x86 ベースシステム	Linux OS x86 ベースシステム
オペレーティングシステム	Solaris 10 1/06 およびそれ以降の Solaris 10 OS 更新版		SuSE Linux Enterprise Server 11 RedHat Enterprise Linux 5 Oracle Enterprise Linux 5
CPU	Sun UltraSPARC ベースシステム Fujitsu SPARC64 プラットフォームベースシステム	AMD および Intel x86 CPU ベースの 32 および 64 ビットシステム (Pentium クラス以降)	
メモリー	推奨: 1G ~ 2G バイト 最小: 512M バイト (IDE で大規模なプロジェクトの作業を行う際はさらに必要となる場合がある)		
インストーラに必要な一時ディスク容量	1.8G バイト	1.5G バイト	1G バイト
インストールされた製品に必要なディスク容量 (df -k コマンドを使用してディスク容量を確認)	1.4G バイト	1.13G バイト	1.12G バイト
スワップ空間	推奨: 2G ~ 4G バイト 最小: 1G バイト システムにスワップ空間を追加するにあたっては、41 ページの「スワップ空間の追加」を参照してください。		

表 1-1 システム要件 (続き)

	Solaris OS SPARC ベースシステム	Solaris OS x86 ベースシステム	Linux OS x86 ベースシステム
オペレーティングシステム構成	Solaris 10 OS の場合: 全体 Solaris ソフトウェアグループと OEM サポート、全体 Solaris ソフトウェアグループ、または開発者 Solaris ソフトウェアグループ。オペレーティングシステム構成を確認するには、インストールしたパッケージを確認する必要があります。それぞれの構成に固有のパッケージがインストールされます。詳細は、Solaris OS のインストールマニュアルを参照してください。		Linux OS には開発またはライブラリパッケージグループを含める必要があります。

IDE、dbxtool、DLight、およびパフォーマンスアナライザを実行するには、Java SE Development Kit (JDK) 6 Update 13 以降が必要です。これらのツールを使用する予定があり、必要な JDK が手元にない場合は、Oracle Solaris Studio のインストール後に、<http://www.oracle.com/technetwork/java/javase/downloads/index.html> から JDK をダウンロードしてインストールすることができます。

インストーラのローカル表示とリモート表示の選択

Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアのインストール中は、インストーラをローカル表示またはリモート表示のいずれかに設定できます。

- ローカル表示。ソースコンピュータとディスプレイコンピュータが同じです。GUI インストーラウィンドウまたは非 GUI インストーラのメッセージは、製品 DVD またはダウンロードファイルを含み、インストーラを実行する同じコンピュータに表示されます。
- リモート表示。ソースコンピュータとディスプレイコンピュータが別々です。ソースコンピュータに製品 DVD またはダウンロードしたファイルをセットしてインストーラを実行します。ディスプレイコンピュータは、GUI インストーラウィンドウまたは非 GUI インストーラのメッセージを表示します。リモート表示を使用してインストールする場合は、この節の以降の指示に従ってください。

▼ リモート表示によるインストールの準備

- 1 ディスプレイコンピュータで、コマンド行に次のように入力し、クライアントから X サーバーにアクセスできるようにします。

xhost + source-computer-name

source-computer-name には、ソースコンピュータ (製品 DVD またはダウンロードしたファイルを含むコンピュータ) で `/usr/bin/hostname` コマンドを実行したときに出力される名前を入力します。

- 2 ソースコンピュータにログインし、スーパーユーザー (**root**) になります。

```
rlogin source-computer-name -l rootname
Password: root-password
```

- 3 ソースコンピュータで、ディスプレイコンピュータに接続されたモニターを表示先に設定します。

C シェルを使用する場合は、次のように入力します。

```
setenv DISPLAY display-computer-name:n.n
```

Bourne シェルを使用する場合は、次のように入力します。

```
DISPLAY=display-computer-name:n.n
export DISPLAY
```

Korn シェルを使用する場合は、次のように入力します。

```
export DISPLAY=display-computer-name:n.n
```

display-computer-name には、ディスプレイコンピュータで `/usr/bin/hostname` を実行したときに表示される名前を入力します。

NFS マウントのファイルシステムへのインストール

NFS マウントのファイルシステムに Oracle Solaris Studio ソフトウェアをインストールするには、NFS パーティションがマウントされている場所に関係なく、サポートされているシステムでインストーラを実行する必要があります。次の手順では、サーバーは、インストールするソフトウェアが置かれる物理ディスクのあるマシン、クライアントは、インストーラを実行してサーバーからファイルシステムを NFS マウントするマシンです。

注 - NFS マウントのファイルシステムとして製品イメージを共有する最良の方法は、サポートされている 1 台のシステムからそのイメージをエクスポートすることです。サーバーでインストーラを実行し、ソフトウェアがインストールされているディレクトリを共有設定します。次の NFS インストール手順は、NFS サーバーが製品でサポートされているプラットフォームでない場合にのみ使用します。

ファイルシステムをマウントしたら、グラフィカルユーザーインターフェース (Graphical User Interface、GUI) のインストーラまたは非 GUI のインストーラをクライアントマシンで実行して、Oracle Solaris Studio 製品をサーバーにインストールできます。Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアのインストールディレクトリとして、ファイルシステムをマウントしたディレクトリを指定します。

ソフトウェアのインストールが終了すると、Oracle Solaris 10 OS が動作するあらゆるマシンで、ソフトウェアをインストールしたサーバーからファイルシステムをマウントして、ソフトウェアを実行できます。ソフトウェアを実行する各クライアントマシンには、必要な OS パッチをインストールする必要があります(付録 D 「パッチの識別番号と説明」を参照)。パッチは、`install_patches` ユーティリティを使用してインストールできます(25 ページの「必要な Oracle Solaris OS パッチのインストール」を参照)。

NFS マウントのファイルシステムにインストールされた Oracle Solaris Studio ソフトウェアをアンインストールするには、インストールに使用したのと同じクライアントマシンでアンインストーラを実行する必要があります。このとき、アンインストーラを実行する前にファイルシステムをマウントしておいてください。

▼ NFS マウントのファイルシステムに Oracle Solaris Studio ソフトウェアをインストールする準備をする

- 1 サーバマシンで、適切なオプションを付けてファイルシステムを共有設定します。インストーラを実行するクライアントマシンの `root` は、NFS ファイルシステムに対する完全なアクセス権を持っている必要があります。

```
share -F nfs -o root=client-machine,rw filesystem
```

- 2 クライアントマシンで、読み取り/書き込みアクセス権付きで共有ファイルシステムをマウントします。

```
mount server-machine:filesystem installation-directory
```

インストール方法の選択

Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアをインストールするには、次の 2 通りの方法があります。

パッケージインストーラ、グラフィカルユーザーインターフェース (Graphical User Interface、GUI) モード

グラフィカルユーザーインターフェースのインストーラは、一連のインストール手順ページを表示するインストールウィザードです。どのページでも、終了、前の手順に戻る、または次の手順に進む操作をできます。インストールディレクトリと、インストールする Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアをコンポーネント単位で選択できます。または、インストーラを実行して実行時ライブラリのみをインストールできます。

パッケージインストーラ、非 GUI モード

非 GUI モードのパッケージインストーラでは、メッセージが表示されずに、Oracle Solaris Studio 12.2 のすべてのコンポーネント、または実行時ライブラリのみがインストールされます。

Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアのインストール

この章には、次の情報が含まれます。

- 19 ページの「Oracle Solaris Studio ソフトウェアのインストール」
- 25 ページの「必要な Oracle Solaris OS パッチのインストール」
- 26 ページの「開発ツールとマニュアルページ用の環境変数の設定」
- 27 ページの「Oracle Solaris Studio 12.2 IDE の起動」

Oracle Solaris Studio ソフトウェアのインストール

Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアと必要な OS パッチを単一ユーザーシステムにインストールできます。また、このソフトウェアと OS パッチを、同じアーキテクチャーのクライアントシステムが使用するサーバーにインストールした後に、OS パッチを、サーバー上の Oracle Solaris Studio ソフトウェアにアクセスする各クライアントシステムにインストールすることもできます。

ヒント-ネットワークからのインストールには相当な時間がかかるため、可能であれば、ソフトウェアをインストールする予定の各システムにインストールバンドルのコピーを作成し、インストーラをローカルで実行してください。

ゾーンへのインストール

ソフトウェアを Solaris 10 システムのゾーンにインストールするには、そのゾーンでインストーラを実行します。大域ゾーンでインストールを行い、ソフトウェアをそのゾーンのみで使用できるようにするには、GUI インストーラの「現在のゾーンのみでインストールする」チェックボックスのチェックマークを付けるか、非 GUI インストーラの起動時に `--current-zone-only` オプションを指定します。

代替ルートディレクトリへのインストール

代替ルートディレクトリを使用してソフトウェアをインストールする場合は、非 GUI インストーラを `--use-alternative-root directory` オプションとともに使用します。

複数システムへのインストール

ソフトウェアを複数システムにインストールするには、GUI インストーラを起動するときに `--recordstate_file.xml` オプションを使用してインストールを記録できます。これにより、非 GUI インストーラで `--state state_file.xml` オプションを指定して、インストールを繰り返すことができます。

グラフィカルユーザーインタフェースのインストーラを使用した **Oracle Solaris Studio** のインストール

グラフィカルユーザーインタフェース (Graphical User Interface、GUI) のインストーラを使用すれば、インストールディレクトリと、インストールする Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアをコンポーネント単位で選択できます。GUI インストーラを起動するときの有効なコマンド行オプションの一覧については、[37 ページの「GUI インストーラのコマンド行オプション」](#)を参照してください。

GUI インストーラを使用するには、Java 2 ソフトウェア開発キット (JDK) 5 Update 3 が必要です。

▼ GUI インストーラによるインストール

- 1 現在スーパーユーザー (**root**) になっていない場合は、次のように入力してスーパーユーザーになります。

```
su
Password: root-password
```

- 2 インストーラがあるディレクトリで、次のように入力してインストーラを起動します。

```
./SolarisStudio12.2-OS-platform-pkg-ML.sh
```

- 3 「システム分析」ページに次の情報が示されます。
 - システムに必要な OS パッチがない場合。
これらのパッチをインストールする必要がある場合は、次の方法でインストールできます。

- 「詳細情報」をクリックしてから、「install_patches.sh を今すぐ実行」をクリックします。
- Oracle Solaris Studio のインストール後に、install_patches.sh ユーティリティをコマンド行から実行します。

install_patches.sh ユーティリティを起動するときの有効なコマンド行オプションの一覧については、40 ページの「install_patches.sh ユーティリティのコマンド行オプション」を参照してください。

サーバーの Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアを使用するクライアントシステムには、install_patches.sh ユーティリティを使用して、必要な OS パッチもインストールする必要があります。詳細については、25 ページの「必要な Oracle Solaris OS パッチのインストール」を参照してください。

- IDE、dbxtool、DLight、およびパフォーマンスアナライザの実行に必要な JDK 6 Update 13 がシステムにインストールされていない場合。これらのツールを使用する予定がある場合は、<http://www.oracle.com/technetwork/java/javase/downloads/index.html> から必要な JDK をダウンロードできます。

4 「Oracle Solaris Studio インストーラ」ページでは、インストールする Oracle Solaris Studio ソフトウェアのコンポーネントを選択できます。

- a. ソフトウェアのすべてのコンポーネントをインストールするには、「次へ」をクリックします。
- b. インストールするソフトウェアコンポーネントを選択する場合は、「ユーザー定義」をクリックします。「インストールをカスタマイズ」ダイアログボックスには、コンポーネントの一覧が表示され、インストール済みのコンポーネントはインストール済みであることが示されます。インストールしないコンポーネントについては、そのチェックボックスのチェックマークを外します。「OK」をクリックし、「次へ」をクリックします。

注- 実行時ライブラリのみをインストールする場合は、インストーラの起動時に、`--libraries-only` オプションが指定されている必要があります (23 ページの「GUI インストーラを使用した実行時ライブラリのみをインストール」を参照)。

5 「Oracle Solaris Studio のインストール」ページで、次の操作を実行します。

- a. ソフトウェアをデフォルトのインストールディレクトリ `/opt` にインストールしない場合は、別のインストールディレクトリを指定します。すでにインストールされている Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアコンポーネントがある場合、インストーラは同じディレクトリに追加のコンポーネントのみをインストールします。
- b. デフォルトでは、インストーラは、Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアとマニュアルページへのシンボリックリンクを `/usr/bin` ディレクトリと

`/usr/share/man` ディレクトリに作成します。以前の **Sun Studio** リリースへのシンボリックリンクが `/usr/bin` と `/usr/share/man` にすでに存在する場合、**Oracle Solaris Studio 12.2** へのリンクによってそのシンボリックリンクは置き換えられません。シンボリックリンクを作成しない場合や、以前のリリースへのリンクを置き換えない場合は、「`/usr/bin` にシンボリックリンクを作成」チェックボックスのチェックマークを外します (**Oracle Solaris Studio 12.2** へのリンクがすでにインストールされている場合、チェックボックスは表示されません)。

- c. ゾーンがあるシステムでインストーラを実行している場合は、「**Oracle Solaris Studio** ソフトウェアを現在のゾーンのみインストールする」チェックボックスが表示されます。デフォルトでは、インストーラはソフトウェアを現在のゾーンのみインストールします。ソフトウェアをすべてのゾーンにインストールする場合は、このチェックボックスのチェックマークを外します。大域ゾーンでインストーラを実行する場合、現在のゾーンのみでインストールを実行すると、インストールされた製品は大域ゾーンのみに表示されます。
 - d. 「次へ」をクリックします。
- 6 「サマリー」ページで、インストールするコンポーネントの一覧が正しいこと、およびシステムにインストールのための十分な空き容量があることを確認します。次に、「インストール」をクリックしてインストールを起動します。
 - 7 インストールが完了すると、「セットアップ完了」ページが表示されます。「完了」をクリックしてインストーラを終了します。
 - 8 インストールが終了すると Web ブラウザが開き、**Sun Online Account** を使用して **Oracle Solaris Studio** のライセンスを **Sun Inventory** に登録することが求められます。登録は必須ではありませんが、登録するとお使いの製品情報を **Sun Inventory** 内で整理することが可能になり、**Sun** からタイムリーな情報が提供されます。この **Oracle Solaris Studio** のライセンスはローカルのサービスタグデータベースにも登録されます(このサービスが利用可能な場合)。
 - 9 **Oracle Solaris Studio 12.2** をクライアントシステムから使用する場合は、サーバーにある **Oracle Solaris Studio 12.2** ソフトウェアとマニュアルページにアクセスするための **PATH** と **MANPATH** を各クライアントシステムに設定します (26 ページの「**開発ツールとマニュアルページ用の環境変数の設定**」を参照)。
 - 10 **Oracle Solaris Studio 12.2** ソフトウェアをシングルユーザーシステムにインストールした場合は、次のように入力して、**Oracle Solaris Studio 12.2** ソフトウェアのツールおよびマニュアルページへのアクセス設定が必要かどうかを確認します。

```
/usr/bin/version
```

- a. `/usr/bin/version: not found` というメッセージが表示されるか、以前のバージョンの **Sun Studio** ソフトウェアが報告された場合は、26 ページの「**開発**

「[ツールとマニュアルページ用の環境変数の設定](#)」の、Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェア用の **PATH** および **MANPATH** の設定の説明を参照してください。

- b. Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアが報告された場合、**PATH** と **MANPATH** を設定する必要はありません。

GUI インストーラを使用した実行時ライブラリのみインストール

GUI インストーラを使用して、Oracle Solaris Studio 実行時ライブラリのみをインストールすることができます。

注- インストーラを実行してライブラリのみをインストールする場合、最初にアンインストールを実行してライブラリをアンインストールしないと、後でインストーラを実行して追加のコンポーネントをインストールすることはできません。

▼ GUI インストーラによるインストール

- 1 現在スーパーユーザー (**root**) になっていない場合は、次のように入力してスーパーユーザーになります。

```
su  
Password: root-password
```

- 2 インストーラがあるディレクトリで、次のように入力してインストーラを起動します。

```
./SolarisStudio12.2-OS-platform-pkg-ML.sh --libraries-only
```
- 3 「Oracle Solaris Studio インストーラ」 ページで、「次へ」をクリックします。
- 4 ライブラリをデフォルトのインストールディレクトリ **/opt** にインストールしない場合は、「Oracle Solaris Studio のインストール」 ページで異なるインストールディレクトリを指定します。
- 5 「サマリー」 ページで、システムにインストールのための十分な空き容量があることを確認します。次に、「インストール」をクリックしてインストールを起動します。
- 6 インストールが完了すると、「セットアップ完了」 ページが表示されます。「完了」をクリックしてインストーラを終了します。

非 GUI インストーラを使用した Oracle Solaris Studio のインストール

非 GUI インストーラは、デフォルトで、Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアのすべてのコンポーネントを、メッセージを表示せずにデフォルトのインストールディレクトリにインストールします。インストーラを `--installation-location directory` オプションを使用して起動すると、選択したディレクトリにすべてのコンポーネントをインストールすることができます。インストーラを `--libraries-only` オプションを使用して起動すると、実行時ライブラリのみをインストールできます (25 ページの「非 GUI インストーラを使用した実行時ライブラリのためのインストール」を参照)。非 GUI インストーラを起動するときの有効なコマンド行オプションの一覧については、38 ページの「非 GUI インストーラのコマンド行オプション」を参照してください。

▼ 非 GUI インストーラによるインストール

- 1 スーパーユーザー (**root**) になっていない場合は、次のように入力してスーパーユーザーになります。

```
su
Password: root-password
```

- 2 インストーラがあるディレクトリで、次のように入力してインストーラを起動します。

```
./SolarisStudio12.2-OS-platform-pkg-ML.sh --non-interactive
```

- 3 インストーラはメッセージを表示せずに動作し、インストールが完了するとプロンプトを返します。インストーラはログファイルをディレクトリ `/root/.nbi/Logs` に書き込みます。

- 4 Oracle Solaris Studio 12.2 をクライアントシステムから使用する場合は、サーバーにある Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアとマニュアルページにアクセスするための `PATH` と `MANPATH` を各クライアントシステムに設定します (26 ページの「開発ツールとマニュアルページ用の環境変数の設定」を参照)。

- 5 Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアをシングルユーザーシステムにインストールした場合は、次のように入力して、Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアのツールおよびマニュアルページへのアクセス設定が必要かどうかを確認します。

```
/usr/bin/version
```

- a. `/usr/bin/version: not found` というメッセージが表示されるか、以前のバージョンの Sun Studio ソフトウェアが報告された場合は、26 ページの「開発ツールとマニュアルページ用の環境変数の設定」の、Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェア用の `PATH` および `MANPATH` の設定の説明を参照してください。

- b. Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアが報告された場合、**PATH** と **MANPATH** を設定する必要はありません。

非 GUI インストーラを使用した実行時ライブラリ のみのインストール

非 GUI インストーラを使用して、Oracle Solaris Studio 実行時ライブラリのみをインストールすることができます。

注- インストーラを実行してライブラリのみをインストールする場合、最初にアンインストールを実行してライブラリをアンインストールしないと、後でインストーラを実行して Oracle Solaris Studio ソフトウェアをインストールすることはできません。

▼ 非 GUI インストーラによるインストール

- 1 スーパーユーザー (**root**) になっていない場合は、次のように入力してスーパーユーザーになります。

```
su  
Password: root-password
```

- 2 インストーラがあるディレクトリで、次のように入力してインストーラを起動します。

```
./SolarisStudio12.2-OS-platform-pkg-ML.sh --non-interactive --libraries-only
```

- 3 インストーラはメッセージを表示せずに動作し、インストールが完了するとプロンプトを返します。インストーラはログファイルをディレクトリ `/root/.nbi/logs` に書き込みます。

必要な Oracle Solaris OS パッチのインストール

Solaris OS で Oracle Solaris Studio 12.2 リリースのコンパイラとツールが正しく動作するためには、いくつかのオペレーティングシステムパッチが必要になります(「付録 D 「パッチの識別番号と説明」」を参照)。必要な Solaris OS パッチをインストールするには、製品ダウンロードに含まれる `install_patches.sh` ユーティリティを実行できます。

GUI インストーラでは、必要な OS パッチがない場合、「システム分析」ページにその情報が表示されます。「詳細情報」をクリックしてから「`install_patches.sh` を今すぐ実行」をクリックすると、`install_patches.sh` ユーティリティを実行することができます。

非 GUI インストーラを実行する場合、インストール後に `install_patches.sh` ユーティリティを実行し、必要な OS パッチがシステムに存在することを確認します。

Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアをサーバーにインストールし、そのソフトウェアをクライアントから使用する場合は、次の処理を行います。

1. 各クライアントシステムで、パッケージインストーラをダウンロードしたサーバー上のディレクトリをマウントします。

```
mount server:filesystem download_directory
```

2. 各クライアントシステムで、`install_patches.sh` ユーティリティを実行し、必要な Solaris OS パッチをインストールします。

開発ツールとマニュアルページ用の環境変数の設定

Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェア製品のコンポーネントとマニュアルページはシステムディレクトリ `/usr/bin/` と `/usr/share/man` にインストールされません。したがって、Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアが使用できるように、`PATH` と `MANPATH` 環境変数の変更が必要になる場合があります。

次の場合、パスを変更する必要はありません。

- 以前に、Sun Studio 11、Sun Studio 12、または Sun Studio 12 Update 1 ソフトウェアをシステムにインストールしていない。
- `/usr/bin/version` コマンドで Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアが報告された。

Solaris プラットフォームの場合は、パス `/installation_directory/solstudio12.2/bin` を `PATH` 環境変数に追加します。Linux プラットフォームの場合は、パス `/installation_directory/oracle/solstudio12.2/bin` を `PATH` 環境変数に追加します。以前のバージョンの Sun Studio、Sun ONE Studio、または Forte Developer ソフトウェアをインストールしている場合は、以前のバージョンのインストールのパスの前にパスを追加します。

Solaris プラットフォームの場合は、パス `/installation_directory/solstudio12.2/man/` を `MANPATH` 環境変数に追加します。Linux プラットフォームの場合は、パス `/installation_directory/sun/solstudio12.2/man/` を `MANPATH` 環境変数に追加します。

Oracle Solaris Studio 12.2 IDE の起動

Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアと必要な OS パッチをインストールして、パスにそのソフトウェアインストールディレクトリを追加すると、ソフトウェアを起動できます。IDE を起動するには、次のように入力します。

solstudio &

注 - このコマンドのフルパスは、Solaris システムの場合は */installation_directory/solstudio12.2/bin/solstudio* に、Linux プラットフォームの場合は */installation_directory/oracle/solstudio12.2/bin/solstudio* になります。

Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアのアンインストール

この章には、次の情報が含まれます。

- 29 ページの「以前のリリースの Sun Studio ソフトウェアがインストールされている場合のアンインストール」
- 29 ページの「アンインストーラのローカル表示とリモート表示の選択」
- 30 ページの「ソフトウェアのアンインストール」

以前のリリースの **Sun Studio** ソフトウェアがインストールされている場合のアンインストール

以前の Sun Studio ソフトウェアがインストールされているシステムに Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアをインストールすると、アンインストーラの実行時に Oracle Solaris Studio 12.2 のみが削除されます。アンインストーラでは、インストール済みのすべての製品コンポーネントが削除されます。

アンインストーラのローカル表示とリモート表示の選択

Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアのアンインストール時には、アンインストーラをローカル表示またはリモート表示できます。

▼ リモート表示によるアンインストールの準備

- 1 ディスプレイコンピュータで、コマンド行に次のように入力し、クライアントから X サーバーにアクセスできるようにします。

`xhost + source-computer-name`

source-computer-name には、ソースコンピュータ (製品 CD-ROM またはダウンロードしたファイルを含むコンピュータ) で `/usr/bin/hostname` コマンドを実行したときに出力される名前を入力します。

- 2 ソースコンピュータにログインし、スーパーユーザー (**root**) になります。

```
rlogin source-computer-name -l rootname
Password: root-password
```

- 3 ソースコンピュータで、ディスプレイコンピュータに接続されたモニターを表示先に設定します。

C シェルを使用する場合は、次のように入力します。

```
setenv DISPLAY display-computer-name:n.n
```

Bourne シェルを使用する場合は、次のように入力します。

```
DISPLAY=display-computer-name:n.n
export DISPLAY
```

Korn シェルを使用する場合は、次のように入力します。

```
export DISPLAY=display-computer-name:n.n
```

display-computer-name には、ディスプレイコンピュータで `/usr/bin/hostname` を実行したときに表示される名前を入力します。

ソフトウェアのアンインストール

グラフィカルユーザーインタフェースまたは非 GUI のアンインストーラを使用して、Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアのインストール済みのすべてのコンポーネントをアンインストールできます。

▼ GUI アンインストーラによるアンインストール

- 1 スーパーユーザー (**root**) になっていない場合は、次のように入力してスーパーユーザーになります。

```
su
Password: root-password
```

- 2 インストールディレクトリ (例: `/opt/solstudio12.2`) に移動します。

- 3 次のように入力して、GUI アンインストーラを起動します。

```
./uninstall.sh &
```

- 4 「サマリー」 ページで「アンインストール」をクリックして、アンインストールを開始します。

- 5 アンインストールが完了すると、「セットアップ完了」ページが表示されます。「完了」をクリックしてアンインストーラを終了します。

▼ 非GUIアンインストーラによるアンインストール

- 1 スーパーユーザー (**root**) になっていない場合は、次のように入力してスーパーユーザーになります。

```
su  
Password: root-password
```

- 2 インストールディレクトリ (例: **/opt/sunstudio12.2**) に移動します。

- 3 次のように入力して、非GUIアンインストーラを起動します。

```
./uninstall.sh --non-interactive
```

- 4 アンインストーラはメッセージを表示せずに動作し、アンインストールが完了するとプロンプトを返します。

トラブルシューティング

この章では、Oracle Solaris Studio 12.2 のインストール時やアンインストール時に発生する可能性がある問題に対処する方法について説明します。

この章には、次の情報が含まれます。

- 33 ページの「TMPDIR が、すべてのユーザーに書き込みを許可するディレクトリを指していない場合、GUI インストーラが失敗する」
- 34 ページの「GUI インストーラを起動するときに GNOME エラーが発生する場がある」
- 34 ページの「インストーラのロックファイルが原因でインストーラを起動できない場合がある」
- 34 ページの「失敗したインストールまたはアンインストールの対処」
- 36 ページの「NFS マウント済みファイルシステムでは、書き込み権限が設定されていない場合、インストールが失敗する」
- 36 ページの「インストールログファイルの表示」

TMPDIR が、すべてのユーザーに書き込みを許可するディレクトリを指していない場合、GUI インストーラが失敗する

Oracle Solaris Studio ソフトウェアへのシンボリックリンクを `/usr/bin` と `/usr/man/share` ディレクトリにインストールするように選択しており、TMPDIR 環境変数が、すべてのユーザーに書き込みを許可するディレクトリを指していない場合、GUI インストーラはインストールを完了できません。この状態の発生を回避するには、TMPDIR 環境変数を設定解除するか、すべてのユーザーに書き込みを許可するディレクトリに設定してからインストーラを起動します。

GUI インストーラを起動するときに GNOME エラーが発生する場合があります

一部のシステムでは、GUI インストーラを起動するときに GNOME エラーが発生する場合があります。このエラーにより GUI インストーラを起動できない場合は、非 GUI インストーラを使用してください。

インストーラのロックファイルが原因でインストーラを起動できない場合があります

インストーラがインストールを完了することなく中断または終了した場合、ロックファイルが原因でインストーラを再起動できない場合があります。インストーラを起動するときに、インストーラのインスタンスはすでに実行されているというメッセージが表示される場合、`/root/.nbi` ディレクトリからのロックファイルの削除が必要になる場合があります。

失敗したインストールまたはアンインストールの対処

Solaris プラットフォームでは、インストーラは、インストールした Oracle Solaris Studio 12.2 パッケージに関する情報を次の 2 つの場所に格納します。

- 製品レジストリファイル、Solaris 製品レジストリデータベース
- `/root/.nbi` ディレクトリ

Linux プラットフォームでは、インストーラは、インストールした Oracle Solaris Studio 12.2 パッケージに関する情報を次の 2 つの場所に格納します。

- インストール済みパッケージのデータベース
- `/root/.nbi` ディレクトリ

一部のパッケージが適切にインストールされていない場合、Oracle Solaris Studio ソフトウェアの使用時に問題が発生します。また、追加のコンポーネントのインストール時や、ソフトウェアのアンインストール時に問題が発生する場合があります。

たとえば、インストールが完了する前にインストーラが終了した場合、アンインストーラ (`uninstall.sh`) がインストールディレクトリに表示されない場合があります。または、`pkgadd` コマンドを使用して任意のパッケージをインストールした場合、`/root/.nbi` ディレクトリ内の `productregistry` ファイルまたは `product-cache` ディレクトリが破壊される場合があります。この場合、アンインストーラではパッケージをアンインストールできません。パッケージを正しい方法で削除して、インストーラを再起動できるようにする必要があります。

すべての製品ファイルが削除される前にアンインストーラが終了した場合、アンインストーラを再度実行しても残りのファイルは削除されません。残りのファイルを正しい方法で削除して、製品のアンインストールを完了する必要があります。

製品をアンインストールするために、インストールディレクトリを削除しないでください。パッケージは製品レジストリデータベースと `/root/.nbi` ディレクトリに依然として登録されているため、インストーラを実行できません。

▼ Solaris プラットフォームで失敗したインストールまたはアンインストールの対処

- 1 次のように入力してスーパーユーザーになります。

```
su
Password: root-password
```

- 2 次のように入力し、**Solaris Product Registry** ツールを起動します。

```
/usr/bin/prodreg &
```

- 3 ツールの左区画で、「未分類のソフトウェア」ノードを展開します。

- 4 **Oracle Solaris Studio 12.2** が含まれているすべてのパッケージ名を選択して、「アンインストール」をクリックします。手順に従ってパッケージを削除します。

- 5 「終了」をクリックしてツールを終了します。

- 6 次のように入力して、`/root/.nbi` ディレクトリを削除します。

```
rm -r /.nbi
```

▼ Linux プラットフォームで失敗したインストールまたはアンインストールの対処

- 1 次のように入力してスーパーユーザーになります。

```
su
Password: root-password
```

- 2 次のように入力して、すべての **Oracle Solaris Studio** パッケージを確認します。

```
rpm -q -a | grep solstudio12.2
```

- 3 次のように入力して、各 **Oracle Solaris Studio 12.2** の rpm パッケージを削除します。

```
rpm -e package-name
```

Oracle Solaris Studio 12.2 rpm パッケージには、たとえば `solstudio12u2-cc-12.2-1` のように、サフィックス 12.2-1 が付加されます。Sun Studio リリースからパッケージを削除しないでください。Sun Studio リリースには異なるサフィックスが付いています。

- 4 次のように入力して、`/root/.nbi` ディレクトリを削除します。

```
rm -r /.nbi
```

NFS マウント済みファイルシステムでは、書き込み権限が設定されていない場合、インストールが失敗する

NFS マウント済みファイルシステムでインストールが失敗した場合、そのファイルシステムに対する書き込み権限を保有していることを確認してください。書き込み権は、次の手順を実行すると確認できます。NFS マウント済みファイルシステムでのインストール方法については、[16 ページの「NFS マウントのファイルシステムへのインストール」](#)を参照してください。

1. 次のように入力して、書き込み権があるかどうかを確認します。

```
touch /net/remote-system/opt/testfile
```

エラーメッセージが表示された場合、書き込み権はありません。次に例を示します。

```
touch /net/harker/opt/testfile
touch: /net/harker/opt/testfile cannot create
```

2. 書き込み権を持つ別のインストールディレクトリを選択するか、またはファイルシステムのアクセス権を変更するようにシステム管理者に依頼してください。

インストールログファイルの表示

Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアをインストールすると、インストールセッションの記録を含むログファイルが自動的に生成されます。ログファイルは `/root/.nbi/logs` に書き込まれます。

インストーラ、アンイン ストーラ、install_patches ユーティ リティーのコマンド行オプション

GUI インストーラのコマンド行オプション

GUI インストーラを起動するときの有効なコマンド行オプションは次のとおりです。

<code>--current-zone-only</code>	現在のゾーンのみインストールします。インストーラを大域ゾーンで実行する場合、このオプションを使用すると、インストールする製品はそのゾーンでのみ使用可能になります。
<code>--help</code>	オプションに関する情報を表示します。
<code>--javahome <i>directory</i></code>	インストーラを実行するときに <code>directory</code> 内の JDK を使用します。インストーラがシステムの標準の場所で JDK を見つけられない場合に、このオプションを使用して JDK の場所を示す必要があります。
<code>--libraries-only</code>	実行時ライブラリのみをインストールします。
<code>--locale <i>locale</i></code>	指定した <code>locale</code> を使用して、インストーラのデフォルトロケールをオーバーライドします。有効なロケールは、en (英語)、ja (日本語)、zh (簡体字中国語) です。
<code>--output <i>output_file</i></code>	インストーラのすべての出力を、指定したファイルに書き込みます。

<code>--record state_file.xml</code>	GUI インストーラのインストーラセッションを記録します。この記録を使用すれば、別のシステムで非 GUI インストーラを使用してインストールを繰り返すことができます。このオプションは、製品コンポーネントのサブセットを複数システムにインストールする場合に特に役立ちます。
<code>--tempdir directory</code>	デフォルトで、インストーラは一時データを <code>/tmp</code> ディレクトリに抽出します。十分な空き容量がシステムの <code>/tmp</code> ディレクトリにない場合、インストーラ用の別のディレクトリを指定できます。
<code>--verbose</code>	詳細な出力をコンソールに書き込みます。

非 GUI インストーラのコマンド行オプション

非 GUI インストーラを起動するときの有効なコマンド行オプションは次の通りです。

<code>--create-symlinks</code>	Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアとマニュアルページへのシンボリックリンクを <code>/usr/bin</code> ディレクトリと <code>/usr/share/man</code> ディレクトリに作成します。
<code>--current-zone-only</code>	現在のゾーンのみインストールします。インストーラを大域ゾーンで実行する場合、このオプションを使用すると、インストールする製品はそのゾーンでのみ表示されます。
<code>--extract-installation-data directory</code>	インストールデータを抽出し、インストールを実行しません。
<code>--help</code>	オプションに関する情報を表示します。
<code>--installation-location directory</code>	Oracle Solaris Studio ソフトウェアを、デフォルトのインストールディレクトリ <code>/opt</code> ではなく、指定したディレクトリにインストールします。
<code>--javahome directory</code>	インストーラを実行するときに <code>directory</code> 内の JDK を使用します。インストーラがシステムの標準の場所で JDK を見つけられない場合に、このオプションを使用して JDK の場所を示す必要があります。
<code>--libraries-only</code>	実行時ライブラリのみをインストールします。

<code>--locale locale</code>	指定した locale を使用して、インストーラのデフォルトロケールをオーバーライドします。有効なロケールは、en (英語)、ja (日本語)、zh (簡体字中国語) です。
<code>--non-interactive</code>	非 GUI モードでインストーラを起動します。
<code>--silent-logs-dir directory</code>	インストーラのログファイルを、指定したディレクトリに書き込みます。
<code>--state state_file.xml</code>	GUI インストーラによって記録された状態ファイルを再生して、インストールセッションをメッセージを表示せずに繰り返します。このオプションを使用すれば、非 GUI モードで製品コンポーネントのサブセットをインストールできます。
<code>--tmpdir directory</code>	デフォルトで、インストーラは一時データを /tmp ディレクトリに抽出します。十分な空き容量がシステムの /tmp ディレクトリにない場合、インストーラ用の別のディレクトリを指定できます。
<code>--use-alternative-root directory</code>	デフォルトのルートディレクトリ / ではなく、指定したルートディレクトリにインストールします。代替ルートとして使用するディレクトリのフルパスを指定します。このオプションは、Solaris OS を実行するシステムでのみ有効です。
<code>--verbose</code>	詳細な出力をコンソールに書き込みます。

アンインストーラのコマンド行オプション

アンインストーラを起動するときの有効なオプションは次のとおりです。

<code>--locale locale</code>	指定した locale を使用して、アンインストーラのデフォルトロケールをオーバーライドします。有効なロケールは、en (英語)、ja (日本語)、zh (簡体字中国語) です。このオプションは GUI アンインストーラでのみ有効です。
<code>--non-interactive</code>	アンインストーラを非 GUI モードで実行し、インストール済みのソフトウェアコンポーネントをアンインストールします。
<code>--output output_file</code>	アンインストーラのすべての出力を、指定したファイルに書き込みます。このオプションは GUI アンインストーラでのみ有効です。

`--use-alternative-root directory`

デフォルトのルートディレクトリ/*ノ*ではなく、指定したルートディレクトリからアンインストールします。このオプションは、非 GUI アンインストーラでのみ有効です。

install_patches.sh ユーティリティのコマンド行オプション

install_patches.sh ユーティリティを起動するときの有効なオプションは次のとおりです。

`-G`

パッチを現在のゾーンのパッケージにのみ追加します。ユーティリティを大域ゾーンで実行する場合、このオプションを使用すると、パッチはそのゾーンでのみ使用可能になります。

`-p`

Oracle Solaris Studio 製品のパッチをインストールします(ある場合)。このオプションを指定し、使用可能なパッチがない場合、そのことを示すメッセージが表示されます。

`-l locale`

指定した *locale* を使用して、ユーティリティのデフォルトロケールをオーバーライドします。有効なロケールは、en (英語)、ja (日本語)、zh (簡体字中国語) です。

`-R directory`

パッチを、デフォルトのルートディレクトリ/*ノ*ではなく、指定したルートディレクトリにインストールします。代替ルートとして使用するディレクトリのフルパスを指定します。

`-h`

オプションに関する情報を表示します。

スワップ空間の追加

スワップ空間の追加

ソフトウェアのインストール先のシステムに、最低限必要な1Gバイトのスワップ空間がない場合は、次の手順でスワップ空間を追加してください。

▼ Solaris システムでのスワップ空間の追加

- 1 次のように入力し、スーパーユーザー (**root**) になります。

```
% su  
Password: root-password
```

- 2 スワップ空間を追加するために、次のコマンドで特定のディレクトリにファイルを作成します。

```
mkfile number[m|k|b] /directory/swap-file-name
```

ここで、*number* にはスワップ空間の容量を指定し、これに続けて容量の単位 (M バイトの場合は *m*、K バイトの場合は *k*、ブロックの場合は *b*) を入力します。*directory* には、スワップ空間の追加権限が与えられているディレクトリを指定します。*swap-file-name* には、作成するスワップファイルの名前を指定します。

たとえば、*foo* ディレクトリに *16mswap* という名前の 16M バイトのスワップファイルを作成するには、次のようにします。

```
mkfile 16m /foo/16mswap
```

詳細は、`mkfile(1M)` のマニュアルページを参照してください。

- 3 次のように入力し、ファイルが作成されたかどうか確認します。

```
ls -l /directory/swap-file-name
```

新しいファイルがディレクトリに表示されます。次に例を示します。

```
ls -l /foo/16mswap
-rw-----T  1 root    other    16777216 Dec 12 14:24 /foo/16mswap
```

- 追加のスワップ空間を指定する場合は、次のように **swap** コマンドを入力して実行します。

```
swap -a /directory/swap-file-name
```

- 次のように入力し、スワップ空間が追加されたかどうか確認します。

```
swap -s
```

出力には、割り当てられたスワップ空間が表示されます。次に例を示します。

```
swap -s
total: 289336k bytes allocated + 27008k reserved = 316344k used, 298336k available
```

▼ Linux システムでのスワップ空間の追加

- 次のように入力し、スーパーユーザー (**root**) になります。

```
% su
Password: root-password
```

- スワップ空間を追加するために、次のコマンドで特定のディレクトリにファイルを作成します。

```
dd if=/dev/zero of=/dir/myswapfile bs=1024 count=number_blocks_needed
```

dir には、スワップ空間の追加権限が与えられているディレクトリを指定します。*myswapfile* には、作成するスワップファイルの名前を指定します。*number_blocks_needed* には、作成するファイルの容量を 1024 バイトの大きさのブロック数で指定します。詳細は、[dd\(1\)](#) のマニュアルページを参照してください。

- 次のように入力し、ファイルが作成されたかどうか確認します。

```
ls -l /dir/myswapfile
```

新しいファイルがディレクトリに表示されます。

- 次のように入力し、新しいスワップ空間を初期化します。

```
mkswap /dir/myswapfile
```

詳細は、[mkswap\(8\)](#) のマニュアルページを参照してください。

- 次のように入力して **swapon** コマンドを実行し、ページングおよびスワッピング用に新しいスワップ空間を使用できるようにします。

```
swapon -a /dir/myswapfile
```

- 6 次のように入力し、スワップ空間が追加されたかどうか確認します。

```
swapon -s
```

出力には、割り当てられたスワップ空間が表示されます。

Oracle Solaris 12.2 のコンポーネントとパッケージ

この付録では、Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアを構成するコンポーネント、およびパッケージの一覧を示します。

表 C-1 には、SPARC システム版 Solaris OS 用の Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアのパッケージ構成とコンポーネント情報を示します。

表 C-2 には、x86 システム版 Solaris OS 用の Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアのパッケージ構成とコンポーネント情報を示します。

表 C-3 には、Linux プラットフォーム用 Oracle Solaris Studio 12.2 の RPM パッケージとコンポーネント情報を示します。

表 C-1 SPARC システム用の Oracle Solaris Studio 12.2 のコンポーネントおよびパッケージ

コンポーネント	パッケージ
C および C++ コンパイラ	SPRO-12u2-cc
	SPRO-12u2-c++
	SPRO-12u2-c++-libs
Fortran コンパイラ	SPRO-12u2-fortran
	SPRO-12u2-f90-libs
dbx デバッガ	SPRO-12u2-dbx
dbxtool	SPRO-12u2-dbxtool
dmake	SPRO-12u2-dmake
IDE	SPRO-12u2-studio-ide
	SPRO-12u2-netbeans
DLight 可観測性ツール	SPRO-12u2-dlight

表 C-1 SPARC システム用の Oracle Solaris Studio 12.2 のコンポーネントおよびパッケージ (続き)

コンポーネント	パッケージ
パフォーマンスおよびスレッド解析ツール	SPRO-12u2-analyzer
数学ライブラリ	SPRO-12u2-math-libs
サポートファイル	SPRO-12u2-backend SPRO-12u2-studio-common
Performance Library	SPRO-12u2-perflib
ScaLAPACK	SPRO-12u2-scalapack
ローカリゼーション	SPRO-12u2-studio-ja SPRO-12u2-studio-zhCN

表 C-2 x86 システム用の Oracle Solaris Studio 12.2 のコンポーネントおよびパッケージ

コンポーネント	パッケージ
C および C++ コンパイラ	SPRO-12u2-cc SPRO-12u2-c++ SPRO-12u2-c++-libs
Fortran コンパイラ	SPRO-12u2-fortran SPRO-12u2-f90-libs
dbx デバッガ	SPRO-12u2-dbx
dbxtool	SPRO-12u2-dbxtool
dmake	SPRO-12u2-dmake
IDE	SPRO-12u2-studio-ide SPRO-12u2-netbeans
DLight 可観測性ツール	SPRO-12u2-dlight
パフォーマンスおよびスレッド解析ツール	SPRO-12u2-analyzer
数学ライブラリ	SPRO-12u2-math-libs
サポートファイル	SPRO-12u2-backend SPRO-12u2-studio-common
Performance Library	SPRO-12u2-perflib
ScaLAPACK	SPRO-12u2-scalapack

表 C-2 x86 システム用の Oracle Solaris Studio 12.2 のコンポーネントおよびパッケージ (続き)

コンポーネント	パッケージ
ローカリゼーション	SPRO-12u2-studio-ja SPRO-12u2-studio-zhCN

表 C-3 Linux プラットフォーム用の Oracle Solaris Studio 12.2 のコンポーネントおよび RPM パッケージ

コンポーネント	RPM
C および C++ コンパイラ	solstudio12u2-cc-12.2-1 solstudio12u2-c++-12.2-1 solstudio12u2-c++-libs-12.2-1
Fortran コンパイラ	solstudio12u2-fortran-12.2-1 solstudio12u2-f90-libs-12.2-1
dbx デバッガ	solstudio12u2-dbx-12.2-1
dbxtool	solstudio12u2-dbxtool-12.2-1
dmake	solstudio12u2-dmake-12.2-1
IDE	solstudio12u2-studio-12.2-1 solstudio12u2-netbeans-12.2-1
パフォーマンスおよびスレッド解析ツール	solstudio12u2-analyzer-12.2-1
サポートファイル	solstudio12u2-backend-12.2-1 solstudio12u2-studio-common-12.2-1 solstudio12u2-compiler-oslibs-12.2-1
Performance Library	solstudio12u2-perflib-12.2-1
ScaLAPACK	solstudio12u2-scalapack-12.2-1
ローカリゼーション	solstudio12u2-studio-ja-12.2-1 solstudio12u2-studio-zhCN-12.2-1

パッチの識別番号と説明

Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアには、オペレーティングシステムのパッチが用意されています。これらは、このリリースのコンパイラとツールを適切に操作するために必要なパッチです。この付録では、このリリースに含まれている Solaris OS のパッチを一覧で示します。これらのパッチをシステムにインストールしていない場合は、`install_patches` スクリプトを使用してインストールできます。このスクリプトは、インストーラのあるディレクトリに含まれます。

表 D-1 には、SPARC システム版 Solaris 10 OS 用の必須パッチのパッチ識別番号と説明を示します。

表 D-2 には、x86 システム版 Solaris 10 OS 用の必須パッチのパッチ識別番号と説明を示します。

ソフトウェアの使用に影響する可能性があるかどうかにかかわらず、特定の問題を解決する追加のパッチ (製品ダウンロードファイルまたは製品 DVD に含まれない) をインストールすることをお勧めします。推奨されるパッチをインストールするには、[SunSolve \(http://sunsolve.sun.com\)](http://sunsolve.sun.com) からパッチをダウンロードして、そのパッチに付属する README ファイルの手順に従います。README ファイルにはリスクに関する重要な情報と適切な手順が記載されています。

表 D-3 には、SPARC システム版 Solaris 10 OS 用の推奨パッチのパッチ識別番号と説明を示します。

表 D-4 には、x86 システム版 Solaris 10 OS 用の推奨パッチのパッチ識別番号と説明を示します。

表 D-1 SPARC システム版 Solaris 10 OS 用の必須パッチ

パッチ識別番号	パッチの説明
118683-05	アセンブラおよび libxprof パッチ (-xprofile オプションで必要)

表 D-1 SPARC システム版 Solaris 10 OS 用の必須パッチ (続き)

パッチ識別番号	パッチの説明
120753-08	libmtsk のパッチ
119963-20	C++ 用 共用ライブラリのパッチ

表 D-2 x86 システム版 Solaris 10 OS 用の必須パッチ

パッチ識別番号	パッチの説明
119961-07	アセンブラおよび libxprof パッチ (-xprofile オプションで必要)
120754-08	libmtsk のパッチ
119964-20	C++ 用 共用ライブラリのパッチ

表 D-3 SPARC システム版 Solaris 10 OS 用の推奨パッチ

パッチ識別番号	パッチの説明
127127-11	カーネルパッチSolaris 10 08/07 リリースよりも前の Solaris 10 OS リリースを実行するシステムで、コンパイラの注釈 (-xannotate=yes) を正常に動作するには、このパッチが必要です。

表 D-4 x86 システム版 Solaris 10 OS 用の推奨パッチ

パッチ識別番号	パッチの説明
127128-11	カーネルパッチSolaris 10 08/07 リリースよりも前の Solaris 10 OS リリースを実行するシステムで、コンパイラの注釈 (-xannotate=yes) を正常に動作するには、このパッチが必要です。
137122-01	カーネルパッチSolaris 10 10/08 リリースよりも前の Solaris 10 リリースを実行し、パッチ 127112 または 127128 がインストールされているシステムで、シグナル処理を使用するアプリケーションを dbx デバッガを使用してデバッグするには、このパッチが必要です。

Oracle Solaris Studio 12.2 コンポーネントのバージョン番号

この付録では、Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアのコンポーネントのバージョン番号を示します。

表 E-1 Oracle Solaris Studio 12.2 コンポーネントのバージョン番号

コンポーネント	バージョン番号
C コンパイラ	5.11
C++ コンパイラ	5.11
Fortran 95 コンパイラ	8.5
dbx デバッガ	7.8
dbxtool	0.10
DLight	2.0
dmake	8.0
IDE	9.0
Locklint	2.6
OpenMP サポート	3.0
パフォーマンスアナライザ	7.8
C++ 標準ライブラリ	5.11
STLport	4.5.3
Sun Performance Library	2010/08/11
スレッドアナライザ	7.8
Tools.h++	7.1.0

索引

I

IDE, 起動, 27

M

MANPATH 環境変数, 設定, 26

N

NFS マウントのファイルシステム, インストール, 16

O

Oracle Solaris Studio コンパイラとツール, アクセス, 26

P

PATH 環境変数, 設定, 26

R

/root/.nbi ディレクトリ, 34

あ

アクセシブルな製品マニュアル, 8-9

アンインストール, リモート表示の使用, 29

アンインストール, 失敗, 対処

Linux プラットフォーム, 35

Solaris プラットフォーム, 35

アンストール, 失敗, 対処, 34

い

インストーラのロックファイル, 34

インストール

NFS マウント済みファイルシステムでの失敗, 36

同じアーキテクチャーのクライアントが使用するサーバー, 19

概要, 13

カスタマイズ, 21

クライアントに必要な OS パッチ, 26

サーバーに必要な OS パッチ, 25

失敗, 対処, 34

Linux プラットフォーム, 35

Solaris プラットフォーム, 35

シンボリックリンク, 22

ゾーン, 19

単一ユーザーシステム, 19

複数システム, 20

リモート表示の使用, 15

ローカル表示の使用, 15

インストール方法, 選択, 17

インストールログファイル, 36

く

グラフィカルユーザーインターフェースのアンインストール、使用、30

グラフィカルユーザーインターフェースのインストール

TMPDIR がすべてのユーザーに書き込みを許可するディレクトリを指していない場合のエラー、33

起動時の GNOME エラー、34

使用、Oracle Solaris Studio ソフトウェアをインストールするには、20

使用、実行時ライブラリのみをインストールするには、23

こ

コマンド行オプション

GUI インストーラ用、37

アンインストール用、39

非 GUI インストーラ用、38

コンポーネント、説明、45

コンポーネントのバージョン番号、51

さ

サーバー、同じアーキテクチャーのクライアントが使用するためのインストール、19

し

システム要件、14-15

シンボリックリンク、インストール、22

す

スワップ空間、確認、41

せ

製品レジストリファイル、34

そ

ソースコンピュータ、15

ゾーン、インストール、19

た

単一ユーザーシステム、インストール、19

て

ディスプレイコンピュータ、15

と

ドキュメントインデックス、8

は

パッケージ、説明、45

パッチ、オペレーティングシステム、Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアに必要な、49

ひ

非 GUI アンインストール、使用、31

非 GUI インストーラ

使用、24、25

使用、実行時ライブラリのみをインストールするには、25

表示

リモート、アンインストール、29

リモート、インストーラの、15

ローカル、アンインストール、29

ローカル、インストーラの、15

ま

マニュアル、アクセス、8-9

マニュアルページ、アクセス、26

り

リモート表示

- アンインストーラ, 29

- インストーラの, 15

ろ

ローカル表示

- アンインストーラ, 29

- インストーラの, 15

